

ヘーゲルの精神概念の起源と形成
――イェナ時代初期における哲学構想の視点から――

飯泉佑介

【研究の概要】

本研究の課題は、G. W. F. ヘーゲル（1770-1831）の哲学における「精神（Geist）」概念の起源をイェナ時代初期における哲学構想のうちに見て取り、その後の形成の出発点となる視座を究明することである。1801年に大学町イェナに移り住んだヘーゲルは、イェナ大学で「論理学・形而上学」や「精神哲学」などを講じる傍ら、カント、フィヒテ、シェリング、ラインホルト、ヤコービらと思想的に対決しつつ、独自の哲学体系の確立に取り組んだ。その成果は、「学」としての哲学の生成を叙述する『精神現象学』（1807年）に結実するが、このときの「学」は、自己産出的で自己運動的な「精神」の自己知として規定される。本研究では、このような〈生成する哲学の主体〉としての「精神」概念の萌芽的用法が早くもイェナ時代初期の論文『差異論文』（1801年）やシェリングと共同発行していた『批判的哲学雑誌』（1802-03年）の所収論文で散見される点に着目し、（1）哲学の生成にとっての「精神」の構成的役割と、（2）その具体的な理論的相貌を解明した。

【研究の背景】

従来の研究においてヘーゲルの「精神」概念は、イェナ時代後半の思想的展開の中で初めて成立したと見なされてきた。その際に決定的な要素と考えられてきたのが、第一に、『イェナ体系構想 I』（1803/04年）、及び、『イェナ体系構想 III』（1805/06年）の「精神哲学」で論じられる意識論の成立と近代的個人の再評価であり、また、第二に、『イェナ体系構想 II』（1804/05年）の「論理学・形而上学」における自己矛盾的論理の確立である。こうしたモチーフの成立は、シェリングの影響を濃厚に受けていたイェナ時代初期の「実体性の哲学」から、カントやフィヒテの哲学を重視する後期の「主体性の哲学」への転換と理解されることも多い。しかし、本研究では、イェナ時代初期のヘーゲルの哲学構想のうち、その「精神」概念の特異な機能と性格を見出すことによって、1960年代以降のイェナ思想形成史研究に新たな光を当てることを目指した。

【研究の成果】

(1) イェナ時代初期の哲学構想における「精神」の構成的な役割

1801-03年頃のヘーゲルが、哲学の生成に関していくつかの異なる構想を抱えていたことは、度々指摘されている。M. バウムの整理によれば、それは、①論理学から形而上学へと移行する「思弁的導入」、②「意識」から哲学へと上昇する「主観的導入」、③対立と分裂が極まった近代の教養段階においてそれらを統一する哲学を求める「哲学の欲求」論などがある。これまでの思想形成史研究では、多くの場合、①の「思弁的導入」論が最重要視されてきたが（K. デュージング、久保陽一）、「精神」概念の形成という観点からすれば、何よりも③の重要性が認められなければならない。というのも、この時期の講義草稿断片や論文からは、哲学以前の「世界精神」が近代という時代に、時代の傾向との対立を通じて、本来の哲学として登場するという基本モチーフを読み取ることができるからである。このことは、ヘーゲルの考える哲学の生成にとって「精神」が構成的な役割を負っていたことを意味するが、本研究は、そのような「精神」の働きが、①哲学（形而上学）への「思弁的導入」や②「主観的導入」に対して理論的に先行しており、根源的な地位をもつことは明確にした。

(2) 『差異論文』における「哲学の欲求」論の展開——「生きた精神」の観点から

(1)で浮かび上がった論点を、『差異論文』に即してより詳細に理論的に究明したものが、(2)の研究成果である。『差異論文』は、その正式な表題のとおり、「フィヒテの哲学体系」と「シェリングの哲学体系」の差異を論じ、両者の統一としての絶対的な哲学体系の概要を説いたヘーゲルの著作であるが、その序論では「哲学の欲求」論が詳しく展開されている。「哲学の欲求」は、自らの回復を目指す統一的な絶対者（精神）の欲求を含意するものの、それ自身としては、対立や分裂を統一する哲学を求める近代の（哲学以前の）思想的状況を表しているにすぎない。本研究では、『差異論文』の理論構成を分析することによって、この「哲学の欲求」論が、哲学体系の内部において哲学史——「永遠な一つの理性の歴史」——として再構成される見通しが示されていることを明らかにした。重要なことは、当時、K.L. ラインホルトの提示した哲学史の理解に対して、ヘーゲルが「生きた精神」を欠いていると批判している点である。本来の哲学にとって暫定的で予備的な役割しかもたないラインホルトの哲学史とは反対に、ヘーゲルにとって本来の哲学の生成に至る哲学史は「生きた精神」によって貫徹されていなければならない。それは、イエナ時代初期にヘーゲルが提示しえた、哲学にとって構成的な「精神」の一つの具体像だということができるのである。

以上